

# DAS REALE & DAS IDEALE

西 谷 啓 治

## 四

シェリングが純なる Differenz はないといふ如く有限界に於ける有限者なるものを考へることは出来ない。對象の方向に虚無を見ることは出来ない。虚無と見えたる時は既に虚無ではない。畢竟フイヒテの非我の如く自我の障礙として無限に打勝たるべきものとして定立さる處にのみ意味がある。障礙にさへなり得ざるものは無いとすらいへない。自覺に於ては先へ進むことは元へ歸ることである。純なる無 schlechthin Nichts も實は自我の無限なる奥底の不可得性を現はすにすぎない。何者かゝる最初のもものは最後のものが直接に現れたものである故である。ヘーゲルが Das Wahre ist das Ganze. Das Ganze ist nur das durch seine Entwicklung sich vollendende We-



マゾフの兄弟に、悪魔を方程式のうちなるXであるといつてゐる。シェリングの所謂相對的統一 (höhere Einheit) としての人のうちに神との對立に入つて實在性を得るもの、打勝たるべきものとして與へられたものといふ意味であらう。コーエンが非合理的なるものを解かるべき課題として考へたのと興味ある一致といはねばならぬが、唯かゝる相對的立場のみに止まるべきであらうか。ヤコブ・ペーネが悪魔は神より最も外へ出される、併し之は反つて最も内に入れられることであるといつた如く、Xの方向に下れば純なる無を見出し得べく、こは即ち絶對者そのものに觸るゝことではないであらうか。コーエンは批判主義の立場に立つて根元よりの生産の一つの方向のみを認むることを嚴守したのであるが、そのために感性直觀に於ける非合理的内容に躓かねばならぬのであらう。シェリングは *reine Differenz* を否定しつゝ眞の實在として *Indifferenz* を考へ有限界に獨自の立場を與へた。コーエンも等しく唯一の根元を認むるのであるが、唯フイヒテの如く根元の生産の方向に反する方向を、それが課題として自己に與へたるXの含む解決の要求と考へた。併し吾々はこゝではシェリングの試みに同意せざるを得ない。然らざれば常識に於ける作用と對象との對立の考もその起源を知ることが出來ぬであらう。併しシェリングは

尙不完全であつた。單に靜的なる絶對者は何事もなし得ぬ。

吾々はすべて一の働きのうちに相反する二つの方向を見る。恰も旅行用のコップの最小の枠が他の枠と連續する如く流出は他面より見れば復歸の方向である。ヘルグソンも實在は二つの極限の間に振動する者と考へた。無限界は即ちその復歸の方向具體化の方向に於て現はるゝものである。併し復歸の方向に於て後より現はるゝものは流出の方向に初めなるものである。故に流出の原動たる分裂の根抵はシェリングのごとく無限界に求めねばならぬ。かゝる二つの方向は非時間的なる太初にありし行爲と時間を創造しゆく行爲として直ちに一の働きのうちに含まれてゐるのであるが、唯有限界と無限界との接觸點に於ける働きに於てのみ二つの方向が分れて現はれる。シェリングの客觀的認識に於ける所謂作用と對象との分裂である。無限なる認識即ち思惟は自己の内容を生産することも考へられ得る、併し die Affizierung を含む直觀に於ては作用と對象とはあくまで分裂してゐると考へねばならぬ。従つてこは吾々の眼に顯はされた唯一の裂け目である。萬物のそれによつて現はるゝ神祕なる根元的分裂の唯一の表出である。こゝより這入つてすべての問題の根抵が求められねばならぬ。

シエリングによれば有限界も無限を含む物も自己に即せる靈シエリングは之を直線と考へた)と結合してイデーを表現して自己同一性を保つ。のみならず物のうちに無限者が次第に顯現的となつて有機體となり理性的存在となる。併し認識界たる無限者自身が顯現した場合は物はそのうちに攝取されて客觀的認識となる。

かく物が一面に於て *idea* より抜け出で、*res* なるは自我に對してのみである。故に自我がある故に現象界があるのである。(然らばこは何故か。この根本の理由を求めてシエリングは後の自由思想に至つたのである)この無限界の有限者即ち客觀的認識は有限界の無限者即ち物のうちに無限として含まるゝ物の靈と如何に關係するか。直觀は一方に於ては物自身であると同時に、他方客觀的認識として背後に全無限界を負ふ。物のうちに前より潜む概念(靈)も認識界の影を宿せるものである。

先づ直觀とは如何なるものか。直觀を離れて物があるのではない。物自體の如きものは今の問題ではない。物に外より直觀が加はるのではない。この點に於ては直觀に内在する概念と異なる處がない。唯異ると見ゆるのは直觀が背後に認識界に接続し、物の靈としての概念が反對に物のうちに隠れてゐると考へられる故である。併し背後に認識界を負ふといふも認識する主體の如きものが先づあつて、その

作用が物に觸るゝ處に直觀が現れるといふ如きことではない。普通に作用が外より働くと考へらるゝのは、心理的立場に無反省に止まる故にすぎぬ。シェリング自身も、心理學が靈をイデーに於て考へずに肉との對立に於てのみ考へる必然的結果として、人間に於てはすべてが因果關係に従屬して絶對者より即ち多様の形式を貫く本質より來る何物もないと主張するゝに至るといつてゐる。(Vol. VI)併し直觀が物自身であるとするれば物の直觀とは物の内面よりの認識でなければならぬ。プラトイが個物の認識はそのうちのイデヤの想起であるといふのが、反つてヘルグソンの純粹知覺の根抵をなすと考へることが出来る。外より作用すると考へらるゝものは實は内面に働くものでなければならぬ。而してこは物に内在する概念を動的に考へたものに外ならぬ。然るに動的に考へられた概念の世界は無限界である。故に有限界も無限界の上に成立ち、物に内在する概念といふ如きものも物の背後に投せられた無限界の影にすぎない。ヘルグソンの共感 *sympathy* といふ如き考もこれを意味するのである。唯物は概念を通じて無限なるのみならず、またイデーを通じて永遠である。故に無限界のうちに置換された後と雖も、自己の同一性を保つて、無限界の攝取中より抜け出づる一面を有し、同時に靈として無限界の投影を自己の

うちに含むのである。これが所謂反省界の發現である。無限界の有限者の永遠が無  
限界を出で、反つて之に對立する處に反省の世界が生ずるのである。こは無限界  
が無限界なる故である。永遠を含み切れぬ故である。現象界が自我に對してのみ  
とはこの故である。併し先驗的に見れば、即ち悟性的理性の立場より見ればかゝる  
イデーもイデーのイデーの影であり、このイデーによつて無限界を抜け出でたる物  
に内在する無限も無限界の投影である。反省的立場即ち單に悟性的無限の立場に  
於ては物は客觀的實在となり同時に認識界に於て之に對立する有限的認識を生ず  
るのであるが、絶對的には直觀を離れて物もなく物の靈もイデーも最後には絶對者  
の無限永遠の影である。併しかゝることは内在する靈を動的に考へることによつ  
てのみ可能である、かくしてのみ吾々は物の基礎に無限界自身を忍び込ませ、物のう  
ちに眠る概念を醒し物を眞の概念界に攝することが出来る。シェリングが物はそ  
の靈によつて自己自らを保持して他のものと區別さるゝことが出来るといふのは  
かゝる還元にその可能の基礎があるのである。

然らば物の靈が働く概念となるべき物のイデーは如何なるものとなるか。吾々  
は經驗的立場に於て物の背後に重なる概念、イデーを有限的認識に移して、その底に

疊んだ。或は直觀のうちに一に結ばるゝ real と ideal の兩面の間の分裂線をこの分裂が直ちに深淵である。こゝに立つて、對象と作用、直觀と思惟、現象界と理念界等すべての分裂を覗き得る。折目として物の無限、永遠を認識界の有限者たる客觀的認識のうちに折り返した。すべては思惟又は意味の世界に移され、直觀の外端を一步出づれば虚無があるのみである如く見える。併し直觀の外向的方向も外なる物に對するものであることが疑ひ得ぬ事實である以上、バークレーを除いて何人もかゝる觀念論に立つた人はなかつた。併しまた先驗的觀念論を嚴守すれば、非合理的經驗内容をそのまゝ合理化し得るとは思はれぬ。もし然りとすればこれも一の見方にすぎぬ。而してバークレーの考も一の見方である。カントとバークレーとを混同した論者の大なる誤謬はいふまでもないが、然もこれを充分に辯護せんとすれば反つて價值の立場を超越せねばならぬのではないか。常識が知覺作用の外に知覺さるゝものを考へるのも何等かの意味がなければならぬ。然らば吾々は再び繰返さう。有限的認識に於て物のイデーは如何なるものとなるか。

物のイデーは永遠者の影である。故に單なる無限界に攝せられた物のうちに閉さるゝイデーは、何等かの意味に於て認識の立場に對して incommensurable なるもので



なければならぬ。Xとして能産即所産の世界に屬すると共にこれを破る一面を有する。前述の如く一面認識界に立つ有限界が他面に之を抜け出で、*das Reale*としての獨立性を得て實在界となるのはこの故である。イデーが無限の認識界に含まれ得ずして、出で、無限と共に投射されたものが有限界である。故に即自に於ける有限的認識のイデーは物となり、概念はその靈となる。

併しかゝる有限的認識の世界も背後に眞の無限界、即論理的思惟の世界に接する。かゝる論理の世界に於ても更に無限、有限、永遠の三面が分れて概念、判断、推論の世界となる。無限の認識界は時間の世界であるが、そのうちなる無限の概念界は時間概念によつて、判断は空間概念によつて物を限定する。推論は永遠である。この概念界が更に無限、有限、永遠に分れて、その無限に一多總體の概念が、有限に於ては限りなき實在性、現實の現實としての絶對的無、及その結合が、永遠に於ては無限と有限との統一として本質と屬性、原因と結果、相互限定の概念が生ずる。而してこの三者が各々無限有限永遠に對應するのである。こゝに吾々は概念界のすべての無限を貫く線、*シエリング*の所謂 *vervielfachen* する線上に *Einheit* の範疇を得る。無限界のみに於ていへば、論理的概念であらうが、更にこの無限界に永遠界を働かしむれば、即ち無限

界が自己に歸つて見れば數の「二」を得る。シェリングもこの世界に算術の基礎を求めたのであるが、そのためには論理より數理への飛躍がなければならぬ。吾々は先に有限界を無限界に置いて見る事によつて物の靈を動的一般と考へた。此處に於てももしこの飛躍が可能であるならば、根抵となる立場に歸つて見ねばならぬ。即ちこゝでは永遠界の理性を自己のうちに映せねばならぬ。かくして眞に思惟が動的となり數一を生産し得る。動的となるとはすべて對立する物の内面に自己を生産むことである。或は逆に考へれば物の上に消える作用が自己内反省の立場に至り、物に對する作用と、一の作用としての結合に入ることである。フイヒテが *reell und ideell* の二つの *Tätigkeit* といふもこれである。論理の世界と雖も理性の立場を豫想してゐるのであるが、唯これが顯現的でない。數理に至つて思惟が自己を自覺するといひ得る。數「二」の交換可能の要求といふのもかゝる作用の自覺に對する要求であらう。他者として對立するものゝうちに作用が生れて、二つの作用の結合が可能となる處に同質的媒介者の基礎がある。こは同時に他者に對する論理的一者も自己に歸ることを意味する。或は即而對自としての具體的思惟そのものが、自己を貫いて産むものが範疇 *Einheit* であるとすれば、それが一步自己に歸りて産むものが數「二」で

ある。論理と數理との關係は物に自己を忘却したる直觀と、物より一步自己に歸つて作用としての自覺を得たそれとの間の關係に比較することが出來やう。しかし兎に角かくすることによつて吾々は實在の方向に一步を進むと考へられる。數理が論理より實在のと考へられるのは思惟の自覺即永遠者の立場の顯現によるのであらう。永遠界に於ては有限界と無限界との絶對的統一に入る、存在と思惟との最高の統一である。數理はこの立場を映す。この立場に立つて二つを統一するのでなく無限界に映されたるこの立場である故、數も單に可能的なるものに止ると同時に直接なる實在と結合し得る。論理の範疇一多、總體も數を通じて實在と關係するとも考へられるのである。無限界に永遠界を映したものは推論である。概念は判斷を超えて推論に於て數を生産する。ヘーゲルによれば推論の各項が各々 *Mitte* と *Extreme* を一度づゝ廻つて、その間に相違が消されて、*die äuss erliche Verstandesidentität, die Gleichheit* の關係に入るとき量的、數學的推論が生ずる。(この各項の *Gleichheit* は同質的媒介者の發生即ち悟性的思惟が自覺して、作用自身がそのうちに顯現的となつたことゝ考へることが出來る)。更に推論が發展し盡して、概念界に *Totalität* が生じた時、概念が (*subjectiver Begriff* にあらずして *Begriff als solcher* としての廣き意味の) 實

現されて、客觀が生ずる。(Ency. § 188, § 193) といふのは思惟が發展の終りに推論を出で、自己をも去つて絶對的立場に於て客觀と結合に入ることを示すものであらう。有限界に於けるイデーとしての物は具體的に見れば一であり、多であり、全體であるといひ得る。個體として一であり、その性質に於て無限であり、その統一に於て全體として自己同一性を保つ。吾々は直覺に於て物を一と見ることは出来ない。眞に純粹なる直覺に於ては無限の推移のみが可能であらう。この一は吾々の思惟を通じて落ちるものといはねばならぬ。具體的全體としての個物は思惟と直觀との結合の上に成立する。故に物はシェリングの考へる如く最高のイデーの模像である。唯このイデーは動的でなければならぬ。物の本質といふ如きものも思惟と直觀との統一を含むものとして、動的イデーの流れの分れであり、これに通じて居らねばならぬ。また先に物に外より働く客觀的認識も實は物のうちなる靈の働くものであると考へた。今認識が客觀的認識としての直觀より自己内反省の方向を進んで思惟を通り、自己自身の無限界をも去らんとする立場に更に大なる動的イデーの立場の顯るることを知る。然るに認識がこの發展に經過せるものは悉く皆の物うちに落ち、そのうちに含まれてゐる。何者、物はイデーを含み、最高のイデーの模像で

ある故である。例へば無限界の無限たる概念の無限、有限、永遠も一多、總體の範疇として物に含まれ、思惟直觀及其結合の物に於ける現れと重なる。即ち認識の發展は客觀的認識を遁つて悉く物に映ずる。物に外よりの働きが動的イデーに於て全體となり自己自身に歸つたとき、物の内に於ける働きも全體となる。外よりの働きが全體となつて自己自身をも忘れたとき、物の内の働きが自己を完成し客觀化する。かくして二つの方向が出會ふ點に物が現はれるのである。認識が動的イデーに於て直ちに直觀と結合すると考へられ、ヘーゲルが概念が Totalität となつて自己を實現して Objekt となるといふのもこの意味である。唯この點より主觀の方向に一步歸つて認識の無限界に立つとき、物は永遠の模倣として、この立場に包み切れず出で之と對立する。作用と對象との分裂はかくして初まるのである。

推論は無限界の永遠を現はす。故に一の推論は永遠なると共にその基礎附けに於て無限の進行を含む。すべて眞理はかくの如き性質を有する。知識の立場に立つ限り永遠はイデーを表すものであらう。併し吾々は前述の如くこれを動的と見ねばならぬ。シェリングの第三の「知る」に顯現し來るものはかゝるものである。第一の「知る」は恒に靜的なるイデーにすぎない。一の推論を自己充足せるものとして

永遠の眞理であるとしても、この推論は尙内に無限の深みを湛へる。これに沈潜しゆく創造作用はこの推論に自己を表はしつゝ自己の奥に無限に下りゆくものである。推論に表はれた永遠が理性であるならば、かゝる動的作用は純なる意志といふべきである。理性はその反省的一面であり、すべての對象界に働く作用をすべての對象界に面する一面に於て表す。故に絶對的理性の立場に於てすべてを統一し得る。すべては絶對者のうちなる有限、無限、永遠の模像であると考へることが出来る。併しかゝる考へ方は一の立場より他の立場に移るとき躓かざるを得ない。こゝに顯るゝ飛躍はすべてに自己の影を映する絶對者より説明することは出来ぬ。

吾々はシェリンが物に卽して現れたる靈として延長を考へたことを見た。更に三つの次元はこの無限のうちに含まる無限、有限、永遠の表現にすぎぬ、かくして有限物は靈を得て、絶對者を模すといふのである。延長を物の靈と考へることは或は可能であらう。一つの物がその延長において互ひに獨立せる二つの部分に分たれば、これを二つの物と考へることが出来る。併し物にはその外に變化して止まざる性質がある。所謂第二次的性質の如きものは如何に考へるべきであらうか。吾々が先に物を直覺の多様と思惟の一との統一と考へたときに、この思惟は物に卽した

ものでなくして純粹なる作用としての思惟であつた。而してこれを *ideal* とし、直觀の多樣を *real* と見做してこの統一を絕對者の映像と考へたのである。今この多樣のうち更に更に物に即した無限と然らざるものとを區別することが出来る。先に純粹なる直覺に於ては唯無限の推移あるのみであるといつた。延長については或はこれを否定し得る立場も可能かも知れぬが、色音等の純なる感覺に於てはこれは如何にしても否定することの出来ぬ事實であると思ふ。勿論物と性質との關係を一般に *real* の世界に於ける本質と屬性との關係と考へ得るかも知れぬ。延長一般といふ如きものも色一般音一般も皆かゝる本質の屬性と考へ現象界の轉化する事象をその様相と考へることも不可能でないかも知れぬ。併しかゝる考へ方は現實の轉化そのものに對する何等の説明とはならぬ。單に理念の世界に於ける概念の機制を與へるのみである。シェリングに於ては本質と屬性との關係は第三範疇の第一として概念界の永遠者のうちの無限に對應するものであつた。この永遠者が無限の無限たる概念界に於てイデーの世界を代表するものとすれば更にその永遠者のうちの無限はイデーの世界の無限なる概念に對應するものである。故にそのうちの有限なる「原因と結果」は *ideal* に對する *real* として之を獨立の意味を有せねば

ならぬ。然らば先に單に様相と考へられた世界も理由と歸結の世界と獨立したる世界であり原因と結果は自己を含む概念界自身にも *tend* なる一面を有せねばならぬ。シェリングの弱點はその第一歩に含まれてゐる。抑々シェリングのスピノザ主義には様相なるものについて考へられて居らぬ。現象界としての相對的統一が恰も様相の世界であるかの如くであるが、此處に於ても等しく *Prä-Existenz* が支配する。こゝにも更に本質と屬性との如き關係が繰返される。故に吾々は現象界のうち、に於て更に様相の世界を求めねばならぬ。併し勿論かゝる三一性の最後まで透徹する世界には様相といふ如きものはなし得ぬであらう。これは、最も低き様相が求められるべき現象としての自然界に於て物の性質の無限なる推移の意味が抹し去られてゐるのを見れば明である。これに説明を與へんとすれば延長一般の如きものや色一般を動的に考へねばならぬ。勿論延長や色を同一に見るとは出來ぬであらう。或は色一般は有限なる客觀的認識に根差し其處に止るも、延長一般の如きものは無限なる認識の世界より來れるものであり、等しく物に含まれて其根元を異にするものであるかも知れぬが、兎に角、色の如きものを物に考へれば、動的なる色一般をも物の靈として考へねばならぬ。シェリングが直線を無限なる概念が物に即



して現れたものといふならば色の如きものについても同時にいはねばならぬ。また色の變化が色一般の自發自展なる働きを意味するならば直線の意識の如きも物に潜む延長一般が醒され動的と考へらるゝことによつて可能である。而して數の「一」も思惟の作用自身の自覺によつて生産されるならば無限に多様なる性質の統一としての物は單に本質といふ如きものではなく、それに自己を映ずる絶對者の單に靜的なる最高理念ではない。思惟は固より感覺も動く一般の働きであるとするれば絶對者も動的一般の統一としての意志であるべきであらう。シェリングは相互限定といふが單に無限なる他の物の現實を自己の可能として含むとのみ考へて、更に一步を出づることをしなかつたシェリングの立場からは當然であるかも知れぬが、無限なる他者のうちに於ては單に可能に止まるものが、自己に於ては現實である。と等しく、自己のうちに可能として止まるものが他者に於て現實である以上、物はかゝる内面的關係を先づ豫想するものであり、物の相互限定といへば既に先づ物を定立して、後にこれにその成立の根據を與へんとするといふ矛盾を含む。これその絶對者が現象界に對して有するのと等しい矛盾である。シェリングはライブニッツの哲學を敘述して單子間の能動所動の相互作用といひつゝも、神をその存在の一般的な

る場現象界の空間に相應する如きものであるといつてゐる。これは勿論かく考へ得るであらうが、併し力を性質とする動的單子の最高なる單子は、單にスピノザの神の如きものに止まるのではないことは明かである。神はアダムを創造し、一切の歴史を創造する神である。

シエリングは物が自己同一性を保つて互ひに他と區別するのは現象にすぎず、絶對的には直觀は無限なる思惟によつて、物の無限なる性質を附與され、固定されたる外形を除かれて思惟と絶對的統一に入るといふ。併し吾々はこれより何事も知ることは出來ぬ。「講演」に於ては多少明瞭に云ひ表はされた考に従へば、かゝる絶對者は主客觀化によつて、永遠の隱蔽より免れて現象的自然界に顯はれる、かゝる自然界に於てもすべての物に通ずる唯一の生命がある、といふのである。併しシエリングに於ては吾々はかゝる生命そのものを現象としても窺ひ知ることが出來ぬ。無限は有限に *enthalten* して理念を表はす、吾々は有限なる物を理念の象徴として見ることによつて神を顯的 (*explizit*) に接することが出來る (*Vorl. VIII*) といふ。併しかゝる象徴は尙物を豫想して後に之に外よりある意味を與へたものではないであらうか。勿論希臘の國の神々<sup>は</sup>今も吾々に蘇つて想像の高き世界に住してゐるであら

うが、然も彼等は最早與へられたる事實そのものを變ずる力を有せぬ。ベルグソンは嘗て心理學者が内面に流動する感情の渦卷を分析して或は喜び或は悲しみと名附け、然もこれに強弱の度を與へて物の如く取扱ふのを批難した。實際に吾々自身も知らざる感情の内面的世界はこれに主宰する藝術家殊に音樂家に聞かねばならぬ。其處に於ては吾々は切々たる諦念に満ちた哀音と、戰鬪的意志の劇しき爆破との、輕やかな戯謔と嚴肅なる苦悶との不可思議なる滲透を見る。音の世界もそれ自身思想感情を有するのである。同様に視覺の世界に於ても藝術家の純なる眼にはオレンヂの一山も海の如き流動と深みとを有する色の世界であらう。かゝる世界に象徴と事實との結合を見ることは出來ぬであらうか。然もかゝる直接に現前する世界が無限なる課題として無限なる解決を要求するのである。Helmholtzにして Helmholtz である。オレンヂの一山のうちに無限に開けゆく色の世界の展望は色のイデーの自らなる發展である。吾々はこの無限なる發展に理念の象徴を見ることが出来る。無限なる自我の奥底を露はし、顧るを得ざる自己の働きの前方に投げたる影を見ることが出来る。すべての物が互ひに相反映して無限なるニュアンスのうちに、固定せる輪廓を没しつゝ相滲透するベルグソンの内面的持續の世界が、シェリングの要

求する如き理念の象徴の世界であると思はれる。

ベルグソンは意識の内面的持續のうちには感覺感情觀念等の錯雜融合があると考へた。バラの香に幼時の追憶を嗅ぐといふことは單なる幻影ではあり得ない。理知の手に觸れられて硬化せる外殻の下に躍動しつゝある生命が、切斷によつて示されたにすぎない。併し眞の意志の活動は單なる持續ではない。寧ろ恒に現在に於て、種々なる方向に走る感覺感情等を現實の一點に結んで、特異なる人格内容を構成するものである。意志は恒に現實に働く。その働く處に生命が考へられるのである。或はこの働きを反省して時間のうちに流すとしても、現實に働く意志の内容としては恒に現實である。現實に於て全過去が一種の衝動力として働くといひ、記憶は記憶自身を保存するといふのも意志の立場に於てのみ可能である。もし記憶の蓄積せらるべき世界があるとすれば持續のうちに流れて流れざる意志に於てはななければならぬ。單に極限として夢想の平面を考へるのは精神活動を時間的のみ見る心理的見方にすぎない。のみならず現實に働くものは單に過去のみではない、ヘーゲルの所謂全精神 (der ganze Geist) である、無限なる可能の世界である。一々の感覺が全人格のニュアンスを有するといふのもこの故である。

意志は全人格を、すべての過去と未來とを現實に働かしむる。反省的に考へても現實に於て全過去が働くと共に豫料に於て全未來が運命附けられるのである。現在が過去に、一足を置き未來に他の一足を投ずると考へらるゝ以前に可能より現實への直接の推移が、更にまた可能即現實の世界がなければならぬ。ベルグソンは極限として二つの平面を考へた。動作の方向に於て極限に進めば、物は互ひにその全側面を向け合ふて中和の状態にある。唯生物が自己の利害に關せざる外的作用を通過させ然らざるものを引き離す結果、知覺が生ずるのであるといふ。夢想の半面に於て極限に至ればすべてが記憶心像となるであらう。すべてが記憶なる世界に記憶はない。然らば如何にして極限なるものを考へ得るか、極限を考へるときは既に之を超越して内に含む立場に立つてゐるのである。自然界と精神界との動的統一の上に立つて考へてゐるのである。唯相對的世界に於て、かゝる意志の表現として二つの世界に跨る感覺——運動的體系としての身體が現れる。所謂知覺心像と記憶とはこの立場に於て、これを包む二つの世界より切り取られたる部分である。吾々は時間のうちに移されぬ以前に夢想の平面に生れる、而もかゝる夢想の平面は同時に直下に働く現實である。時のうちに流轉する吾々の意識に直接して恒に夢の

世界がある。「蓮池の深さ忘るゝ浮葉哉」といふが如く、この現在は永遠の上に浮ぶのである。嘗てエックハルトも父子精靈の *Dröfahigkeit* になぞらへて *memoria, intellectus, voluntas* を考へた。併しその「決して知られざる神」は *ein namentloses Nichts, ein ungewordenes „Bis“* であつたのである。(Buttner, I, S. 178) こゝに意志は永遠より永遠に涉つて自己自身の内に歸つて憩ひつゝある。眞に最も深き静止の如く静かなる働き、最も高き働きの如く動的なる静止である。意志はこゝに於て *Ich=Ich* に歸る。すべてが意志の純なる働きのうちに溶かされてすべてが透明となつたとき意志は自己自身の直観に入る。プロテユスの一者、スピノザの自ら自らを愛する神は、意志が意志自身に映した純粹の姿である。或は吾々は永遠の相の下には何物も見ざる事が出来ぬといはれるかも知れぬ。併し有限無限の衣を拂つて見出すものこそこの自我である。すべてを捨てゝ尙殘るものが自我である。げに *Wunder des Wunders* といふべきである。フイヒテが *Ich=Ich* をすべての意識現象の第一の原理とするのもかゝる奥底を露はしたものと考へることが出来る。フイヒテに於てはアルファであつたが、こゝではオメガである。而してアルファがオメガであるとは自ら自らに働く純なる意志に於てのみ眞である。シユライエルマツヘルが宗教は宇宙の直観であるといふ

時、かゝる世界が豫想されてゐるのである。

## 五

唯かゝる意志の否定の一面として、かゝる直観の世界に *Nicht-ich* に對する如き關係が現はれ、ば理性の世界が開展される。(こは如何にして可能であるかは *シェリング* 後期の問題であるが、この *Nicht-ich* の現はるゝ世界は *フイヒテ* の知識學の實踐的部分と平行して、純なる行爲の世界、道德の世界であらう。もし然りとすれば根本惡の發生に自然精神萬物の出現の根柢を見た *ヘーゲル* の如き思想に至るであらう。こゝに於ては *シェリング* が恐らく尙半意識的に、*ヘーゲル* が充分の意識を以て發展せしめたる *das Logische* 或は *das Dialektische* の發展が現れる。かゝる非我の定立と共にすべての世界が非時間的に流出する。これ等の世界を支へるイデーはイデーのイデーとして、絶對的理性に統一されてゐる。故にかゝる理性はすべての世界に面する意志の半面である。意志はかゝる理性の裏に瀕つて見ることが出来る。絶對的理性の世界に於て最初のもの、寧ろ *ヘーゲル* の考へた如き論理の無限界であり、實在の有限界はその後に現はるゝものと思ふ。*シェリング* に於てこの順の逆である

のは、その絶對者がヘーゲルのそれと異つて、第三なる *das An und für sich* としての永遠者なるのみならず、一面すべてを超越して自己のみを直觀する超越的意味を有して居た故であらうがもしこの意味を含めて絶對者を考へれば意志の如きものにならねばならぬ。故にヘーゲルの理性は主知的立場より見てより純粹である、同時にシエリングが之に促がされて意志の世界に這入つたのも當然である。併しヘーゲルの理性も意志の反省的一面である。ヘーゲルの體系は哲學を頂くが *Philosophieren* するものも意志である。意志は他のすべての世界に働くと共に哲學に働く。唯理性は道德藝術その他のすべての世界に働く意志の反省である故、善も美もすべてが哲學のうちに入り知識が知識自身に歸つて哲學が完成する。併しこの故にまたすべての世界は哲學と異なる。吾々は現實の一舉手を以てかゝる世界を破ることが出来る。勿論これは一種の循環であるかも知れぬ。意志の働きはすべてロゴスの圈内に落ちる。吾々は一步もこの埒外に踏み越えることが出来ぬとも考へられる。理性を超越せんとする働き自身が理性の圈内に動くものであるかも知れぬ。併しベルグソンもいふ如くかくしては吾々は一の新らしき習慣をも作ることが出来ぬ。吾々を與へられたものゝ圈内に閉ざ籠めんとするのは理性の本質である。併し行



爲はこの圈を破る。Mais l'action brise le cercle. (L'évol. Créeat, P. 210) 所謂圓を畫いて入るも三十棒、入らざるも三十棒である。ロゴスの世界を支へるものも意志の一作用にすぎぬ。故に das Dialektische 發展に於て一の立場より更に高き立場に移り行く時に働くものは意志の尖端である。意志が辨證論的發展をするのでもなく其うちに這入り切るものでもない。恰もシュライエルマツヘルが線を切斷する點は線に屬するより寧ろ直ちに無限より湧出するものと考へた如く、意志は永遠に現實であり、この永遠の現實に歸つて、立場の飛躍も可能なのである。故に總體の範疇より數に轉ずるにも論理的空間より純粹空間に移るにも、論理と數理の世界更に直觀の世界の切點に働くものは意志である。意志は無限なる内接圓の切點である。唯理性の反省界に於ては二つの圓の外接する切點に斷續的に姿を現はすのである。

ヘーゲルの論理學に於ては、概念は直ちに具體的なるものであり、その三契機は互ひに自己を他のうちに見出して、一にして多なる關係に入る。唯その Einzelheit の契機が概念の否定的自己内反省として、三契機を分離せるものとして定立する。この die erste Negation によつて概念自身が限定されて Besonderheit に移る。即ち先づ分たれたものが、分たれたものとして自己を保ち、同時に一が他であるといふ同一が定立

される。この概念の定立されたる *Besonderheit* が判断である。(Ency. S. 163—5) 即ちシエリングの所謂永遠者に相當する *Einzelheit* が概念の無限界に含まれ得ずして、これを抜け出づるといふ第一の否定によつて三契機が分れ、實は實在の段階に於て進むのであるが、所謂外的の結合に入る。これを結合する *Besonderheit* はかゝる外的結合の世界として無限を代表する概念の世界より獨立して有限を代表する判断の世界となる。概念自身のうちに含まれたる *Besonderheit* が概念を動かして判断となす。

*das Allgemeine* の *Besonderheit* がその *das Allgemeine* を *das Besondere* となす。即ち *das Einzelne* は概念の一契機となりつゝ、これによつて合理化し盡されざるものとしてその自己内反省を惹き起すのであるが、然もヘーゲルも *das Einzelne* を *das Wirkende seiner selbst* といふが如く、この自己内反省は *das Einzelne* が自己に歸りゆく發展を考へる事が出来る。即ち *das schlechthin Konkrete* としての概念の圏内に於て *das Dritte* なるものは實は *das Erste* であり同時にこの圏を超越して更に高き圏をそのうちより湧出せしむる方である。かゝる方は概念の圏に於ける單に一の契機としての *das Einzelne* を解せらるべきではない。もしかく解することによつて *das Dialektische* の世界が可能であるならば、この力はこの背後に恒に現實として接し、働くものでなければ

ならぬ。かゝるものが純なる意志であり、*das Einzelne* はロゴス界に於けるその投影である。紙窓白を生じて月初めて來るともいふべきロゴスの世界の反省的溯源的發展はこれより出で、之に歸る。かゝる意志の反省的一面としての理性の世界即ち否定の否定の世界に於ける新らしき直觀は常にこゝより汲まれるものである。

*das Dialektische* が一般より特殊に行くに反し意志は特殊より特殊にゆく、否意志の働く處、そこに特殊があるのである。意志の働きは旋律の全體が一音の加はり來る毎に變ずる如く、一々が特殊的である。併しかくいふも既に意志の直觀を離れる。可能より現實への直接なる推移の立場であり、時間の生産に入る立場である。こゝに於て *Ich=Ich* は一切の根元である。かゝる意志の對自の立場を離れて即自に立てば而してこの即自は直ちに即而對自である。意志に於てのみかくいふことが出来る。可能なるものが直ちに現實である。かくいふも旋律が全く奏で終られたシェリングの靜的絶對者ではない。寧ろ後にシェリングが *im Früheren auch schon das Spätere mitwirkt und alles in Einem magischen Schlage zugleich geschieht. (Wesen d. menschl. Freiheit.)* といふ如くすべての音が一時に鳴らされて、旋律全體を一瞬にかなでるといふ如き動の極の立場である。かゝることが不可解なのは意識我の根抵に立つ反省が、旋律を時

間のうちに續けることによつてのみ捕へ得る故である。意志の直觀に於ては意識我をも去る。

かゝる直觀より意識我に下るにはこれに對する *Nicht-ich* の如きものが定立されねばならぬ。かゝる立場に於て意志は自己を直觀する意志より自己を實現する意志自己を啓示する意志となる。これと同時にその反省的一面なる絶對理性が現れ自己啓示的意志がこの理性のうちに屈折してそれを破つたときに行爲の主觀としての自我が現れる。自我は個人我となり理性はそのうちに投射されて、悟性的理性即ち意識一般の如きものとなる。この立場に於て一切の知識が成立つ。個人我に更に反省が産れるのである。自我の實踐理性は神の意志を純粹理性はその叡智を表はす。故に知識我の根柢に實踐我が考へられる。かゝる意識一般を含んで超越する自我は社會を構成する。社會は客觀的精神として神の國の反映であり、意識一般は個人のうちにある社會である。吾々は自我のうちに無限なる人格を含むと考へることが出来る。併しこれ等のことはすべて哲學なる絶對理性の立場に於てある。フイヒテ以來用ひられた區別に従へば *für den Philosophen* であつて *für das Ich* ではない。後者に於ては自己の行爲 *Handeln* の忘却がある。唯哲學者のみこの行爲

を反省する。nur der Philosoph denkt dieses Handeln. (Fichte, Zweite Einl. 7ff.) 反省的自我には道徳も斷言的命令であり、知識我の對象界も外なる實在である。忘却は故に第二の反省による。ヘーゲルの所謂第一の否定は實は後にシェリングの考へた如き太初的反省の第二の反省である。この第二の反省によつて萬物が生ずる。併し第二の反省は第一の反省に根差す。das AllgemeineのBesonderheitがこれを das Besondereとなすといふのもこれを辯證の面に映じて見たものである。ヘックハルトも神が自己の背を取れば萬物は消え失せんといつた。(Züge got daz sine an sich, alle creature würden zu nichts. Pfeiffer, S. 51.) 故に吾々は第二の反省によつて生ずるものを否定し、第二の反省をも見失つて神の背に達することが出来る。神の背はヘーゲルの絶對的理性である。ヘックハルトが“Und meine Natur ward wesenslos”: weil ihr Eigenwesen ihr so ganz entschwindet, dass nichts mehr überhaupt übrig ist, als ein ewiges “Ist.” Dieses Ist aber besteht als die Einheit, die des Sein selber ist—ihr eigener und das aller Dinge! (Buttners Übers. 1, 194) なる如き Ist である。故にその發展の出發點は最も抽象的なる Sein であつた。こはヘックハルトの Sein selber を全く消極的にしたものに外ならぬ。第一の契機たる Allgemeinheit が一契機として現はるゝのは神の背の世界に於ては當然である。一者の直

觀に於てはシェリングの所謂濁りなき統一あるのみである。Alles in Allem である。濁れる統一 (höhere Einheit) は消極的極根としての Nichts の薰染を含む。積極の極に至つて全く無を消す事が出来る。無が無なくなる。併しこは無が自己に歸つたことである。無が無となるのは無が有ることである。眞の無は即ち眞の有である。佛魔一紙ともいふべき厚味なき紙の表裏の如きものである。其處には轉化の世界はない。或は寧ろ有無の間に存する。併し醸つて見ればこの閃光 (Funkle) は無限の轉化である。表より裏へ行くには圓の全周を通らねばならぬ。故に時間は無限の一次元に延長すると同時に現在は直ちに永遠に繋がる。無限の轉化は一瞬に行はれると考へ得る。自己を直觀する一者は自己を啓示し行く一者である。而して無が無となる所有に接する如く、一者は一者である。唯無が定立されば即が無が無とせられて生ずる無限の轉化の第一歩として全く無限定なる有が現はれる。轉化の初めに(而してヘーゲルは初めに於ては物はまだ無い、併し無ではなくして既に有を含むといつた。Ency. § 88 Ann.3) 具體的有が最も抽象的有となつて出現するのである。

併しエックハルトも ungewordenes "Bin" といふ如くかの Ist が Bin となり、神の正面

が顯れ、ば純なる意志あるのみである。純なる意志と絶對的理性との間に高き立場に於ける cogito ergo sum を Ich bin Ich の關係を見る事が出来る。神の正面に出づることは不可能であるといふか。それは自我の奥底が測り知ることの出来ぬのを意味するにすぎぬ。併し吾々が嘗てシェリングの體系に於て層をなすすべての世界の無限者が一線に貫かれ、數二の生産を切點として集ると考へたと等しく働くことによつて大なる意志が自己の根柢に現れ、自己の意志となる、或は自己の意志と切する。吾々は道德的確信に於てこれを自知する。斷言的命令といふもその背後に Ich bin Ich なる確信を豫想せねばならぬ。自己が自己に命令する事が根柢になくしては斷言的命今も不可解である。道德の自律性とはこの意味である。すべて實踐我的働きに於て我と神とは一となる。基督我に生くといはれる如く道德に於て我と神とは一體として働く。神が永遠の今であるとすればこの行爲は恒に現實である。最後の審判の日はこの現實にあるといふことが出来る。——すべての行爲は道德的である。哲學することゝ雖もこれに洩れぬ。かゝる働きは辨證の世界には屬せぬ。Einzelnheit 第三の契機はその投影たるにすぎない。しかし辨證がそれを自己のうち

機である。吾々は嘗てシェリングに於て、無限界の核心たる無限の概念界のうち、に於ける有限を表はす中間帯に更に限界なき實在性と、現實の現實、及その結合とを見た。この三者は無<sup>限</sup>・有<sup>限</sup>・永<sup>遠</sup>、或は概念判断推論に對應するのは勿論である。この限界そのもの或は現實の現實といふ如きものに吾々は無限の深淵を見る。何者この切斷より湧出する力によつて一切の創造が行はれるのである。前に述べた如くこの限界そのものは概念界の有限者に含まるゝ有限として、この有限者と一點に内切し、兩者を貫いて出づる力は更に自己を含む概念界に働き、これを判断界に動かす。全無限界の有限としての判断界の根元は無<sup>限</sup>の概念界のうちなる有限者のうちの有限にまで求められる。恰も蓮華水中にあるときは蓮華水を出づれば荷葉團々といふ如く、この無より湧き上る力が次第に高き立場に於て大なる世界を構成する。エックハルトはこの事を明瞭に説いて、靈は三者の圓環過程の中央點より萬物を創造するといつた。(Wenn die Seele so den Kreis eifrist mit ih. em Denken durchläuft und ihn doch nicht zu schliessen vermag, so wirft sie sich in seinen *Mittelpunkt*. Die er *Mittelpunkt* ist das Schöpfervermögen der heiligen Dreifaltigkeit, Kraft welches die Drei, selber unbewegt, alle ihre Werke vollbracht haben. In ihm wird nun auch der Seele schöpferisches Allvermögen zuteil. Buttner, S. 191) 一〇考



は更にヘーゲルに至つて最も深くせられた。その「黎明」の著には根本悪の問題に結合されたるこの思想が内より發する不可思議なる光に輝く世界を展開してゐる。後には特にヘーゲルがこの道を繼いで論理の世界にこのテーマを用ひて辨證法を作つた。然るにシェリングは判断について説く處なく、その導入に伴つて來るべき論理の世界の關係の錯雜を解き得なかつた故従つて概念の世界に於て判断の世界との聯結を含む限界そのものゝ意義をも認めなかつた。併し限界そのものはエックハルトの所謂「名もなき無」であり、自我の錘り知れざる深みである。

das schlechthin Konkrete たる概念に對する第一の否定とは如何なるものであるか。其否定の働きは判断に於て繫辭 ist に表はされてゐる。ヘーゲルによれば das Einzelne ist das Allgemeine の ist は概念がその外發 Entäußerung に於て自己同一を保つ事を示す、其主語は das unmittelbar Konkrete であり、述語は das Abstrakte, Allgemeine である。故に ist に結合されて後者の一般は前者の限定を容れてこの限定を Besonderheit となす。これが主語と述語の Identität であり Inhalt である。併し Identität は逆の方向に於て、述語が限定されて生じた内容に達せねばならぬ。此 Identität に於て主語と述語とは特殊と一般として各々の限定を他に與へつゝ、最初は抽象的なる Identität としての ist を充實し

てゆく、かくして判断は内容ある繫辭によつて限定されて行き終には主語述語が各々全判断を表はす者となる。(Ency. § 166-§ 171). 然るに最初に特殊と一般の媒介として現はれた者は特殊のうちの一般的性質であつたが、之は實は主語と述語の統一であり、概念自身であつて、主語述語が全判断を表はすに至つて空虚なる繫辭は充實される、かくて三つの判断が生じて推論に赴く、といふのである。この考へより吾々は何を知るであらうか。初め概念が分たるゝや内容は空である。das Einzelne ist das Allgemeine、といふのもこの故である。然るに述語はその一般のうちに主語の限定を入れて自己を限定し更にその限定を主語に入れて之と結合し、かくして一般を含む特殊が生ずる。こゝに於いて内容が充實されたのである。ヘーゲルが判断の進行を das Einzelne ist das Allgemeine より das Besondere ist das Allgemeine へ、更に das Einzelne ist das Besondere と考へるのはこの意味であらう。(§ 166, Anm.) 然らばその内容とは何を意味するか。ヘーゲルによればそれは *ist* に現れる、*ist* は初めは抽象的であり、充實され盡せば概念となる。das Einzelne ist das Allgemeine の *ist* は das Besondere を現すものであるが充實された後には概念自身である。推論は定立された概念である。(der Schluss ist nichts anders als die gesetzte (zunächst formell-) reale Begriff. § 181, Anm.) 吾々は先に概念その

もの Begriff als solcherのうちの Besonderheitの契機がこれを動かして判断界の現はるゝを見た。次にこゝでは吾々は概念が初めは一般と特殊の媒介の根據たる、主語の直接なる性質として、空虚なるものに於て自己を現はし、自己の内容を充實しゆくにつれて ist が Besonderheitとなり、終に空虚なる概念がその内容を得て、E-I-B-Aの推論となるを見る。概念そのものと推論との中間帯なる判断は概念の自己充實の過程であり、或は推論を定立されて sein になつた概念とすれば自己定立の中間に現はるゝものである。概念は最も抽象的なる判断 das Einzelne ist das Allgemeine の ist として現れ、判断が自己に歸つて最も具體的となつた das Einzelne ist das Allgemeine に於て das Besondere として現れる。これが推論である。

然らばこの二つの事實に於て吾々は何を見るか。唯 Besonderheitの契機の働きが全部を一貫して居るのを見ることは出来ぬであらうか。概念に含まれたる Besonderheitが概念を判断となし、この概念はその Besonderheitのうちに自己を秘めつゝ次第に自己を熟させ終に顯現的となるに及んで判断を推論となす。こは恰も概念より判断に移る際と等しい。而してその推移の力となるものは恒に Besonderheitの契機である。こは判断界に於てそれが ist として Identität 即ち Inhalt となるを見ても明かである。

ある。内容はいはゞ核である。概念そのものに於てもその *Besonderheit* をその核と考へることが出来るであらう。

かく判断が概念の *Urteilen* であり、それに働くものは *ist* に現れたる概念自身であるとするれば、定立されて *real* となる概念としての推論は立場の飛躍を豫想せねばならぬ。推論を構成する命題の各々に働く一般は各々概念の三契機の一を表はしつつ、自己自身概念として三契機を含む。故にもし判断の一般に平行して推論の一般を求むれば、概念の概念一般の立場に立たねばならぬ。この一般の一般を根柢として推論に於て概念の三契機が自身概念に具體化されて關係に入る故、概念そのもの *Begriff als solcher* に於てもヘーゲルのいふ如く各の契機自身が互ひに他を含み概念全體である (§ 160, 163, Anm.) をいひ得るのであらう。論理の世界は悟性的無限の世界であるが、推論の背後には理性の永遠が顯現する。概念は概念の概念に具體化されるのである。ヘーゲルによれば、すべては概念である。而して概念の存在とはその契機の分裂を意味する。(Alle: ist Begriff und sein Dasein ist der Unterschied der Momente desselben) 即ちその *allgemein* な性質が *Besonderheit* を通じて外面化され、實在化されて自己内反省によつて自己を否定して *das Einzelne* となる。(so dass seine *allgemeine*

Natur durch die *Besonderheit* sich äusserliche Realität gibt und hierdurch und als negative Reflexion-in-sich sich zum *Einzelnen* macht.) 或は逆の方向に、實在的なるものは *einzel* なるものであるが、これが自己の *Besonderheit* を通じて *Allgemeinheit* を自覺し自己を同一となる。然るに實在的なるものは一つであるが、また概念の契機の差別でもある。 (Das Wirkliche ist Eines, aber ebenso das Auseandertreten der Begriffs-momente.) 即ち推論は概念を判断との綜合として、概念の如く統一を含むものであり、判断の如く契機の分裂を許すものである。とともに、推論の發展は或る契機の他の二者に對するかゝる媒介 (Vermittlung) の Kreislauf であり、これによつて實在的なるものが一つのものとして定立されるのである。 (S 181, Anm.) かくしてヘーゲルはすべては一の推論であるといふのである。即ち推論の發展に於ても、恰も概念より推論に至るとき初め空虚なる *is* があつた如く、こゝに於ても推論の分裂以前の具體者にして推論の發展がこれに歸る如き實在的なる者は、初めは空虚であり、*is* が次第に充實して行つて概念となり、定立された概念たる推論が生じた如く、この充實されたる *is* に外ならぬ概念の媒介が推論に於て更に B. E. A の Kreislauf をなすことによつてこの Eines としての實在的なるものが定立されて Objekt となる。即ち判断に於て主語より述語へ、述語より主語への二つの

方向を重ねて内容を得たる如くこの Kreislauf (E-B-A, A-E-B, B-A-E) によつて各々の契機が各々の位置を廻ることによつてその相互間の相違が消されて Gleichheit が生じ、推論の一般(即ち das Wirkliche ist Eines) もその契機も等しく Totalität となつて容観化が完成される。即ち推論のうちに契機の差別が全く消えて透明となつて一般者が自己に歸り、自己を忘れて自己をも去らんとして内より落すものが Objekt である。

(Diese Realisierung des Begriffs, in welcher das Allgemeine diese eine in sich zurückgegangene Totalität ist, deren Unterschiede ebenso diese Totalität sind, und die durch Aufheben der Vermittelung als unmittelbare Einheit sich bestimmt hat,—ist das Objekt. (§ 193)) 併し吾々は ist の充實の背後に概念自身の働きを考へ得た如く、*diese eine* Totalität に至る媒介の Kreislauf の背後にも一般の一般といふ如きものを考へ得ぬであらうか。抑々推論の表はす der gesetzte reale Begriff 又は das Wirkliche ist Eins. といふ如きものは如何なるものであるか。ヘーゲルは das Wirkliche kann wirken : die Einzelheit des Begriffs aber ist schlechthin das Wirkende, das Wirkende seiner selbst. (§ 16B, Anm.) といつてゐる。然るに推論は定立された概念であり、容観は定立された推論の一般であるとするれば、かゝる定立のみならず概念の Besonderheit を定立して判断たらしめる das Wirkende seiner selbst といふ何處に見出せるべきであらうか。

あるか。Eines Wirkliches & diese eine Totalität がそれではないであらう。こは恐らくシ  
 エリングの立場である。然らば吾々は、*ist*の充實の背後と同様に媒介の *Keislauf*の背  
 後に働くものを考へねばならぬ。これを前の如く概念、概念の概念と考へるならば  
 この概念の自己を分析し自己に働く自覺的發展が辨證の根柢になればならぬ。  
 この働く概念は單に *das schlechthin Konkrete*のみでもなく *Ein Wirkliches*でもなから。そ  
 の間の發展に恒に働く一般者である。三契機の一としての *Einzelnheit*は既にこれ  
 を辨證界に投射したものである。辨證も恒にこの背後に働く直觀に歸つて新らし  
 く出發する、神の背に於ける發展の *Kreis*の末端は恒に神の正面を指す。神の正面即  
 ち自我の奥底に於ては特殊より特殊への働きがある、概念の契機全體が働く如きも  
 のあるのみである。吾々が *Besonderheit*を辨證の核と考へたのもこの故である。青  
 天に白日を走らすといふが如き特殊も一般も、動も靜も一つに輝く世界あるのみで  
 ある。

*ideal*の世界の *Mittelpunkt*がその含む *Einzelnheit*のためにこれより抜け出で、*real*とし  
 之に對立するところ、この飛躍に働くもの、その後 *ideal*と *real*との聯結を維持するもの  
 は何であるか。これを *Idee*の發展といへば既にこの働きの足跡を固定して見たも

のである。何者 ideal も real もそれ自身一の完き世界をなし、各々の獨立なる作用に支へられる。作用と作用との間に辨證は考へられるかも知れぬがその作用自身は決して辨證的に働くのではない。藝術家が視るのは更に高き立場に至らんとする過程ではない。視るために視るのである。視ること自身が視る目的である。すべて作用はかゝる性質を有する。こは純なる意志の性質である。作用と作用との間に立場の聯結をなすのは意志の反省的一面たる哲學的理性の所作にすぎない。

ヘーゲルが das Fortgehen des Begriffs ist nicht mehr Übergehen noch Scheinen in Anderes, sondern Entwicklung, indem das Unterschiedene unmittelbar zugleich als das Identische miteinander und mit dem Ganzen gesetzt, die Bestimmtheit als ein freies Sein des ganzen Begriffs ist. (§ 161) といふときその概念はベルグソンの譬を藉りれば、無限なる直線を自己のうちより引き出す點に於ける働きはなくして、引き出された線のうちに働き、線を延長せしめるものとして考へられた働きである。こは點に於ける働きの投影にすぎない。一にして多なるヘーゲルの概念の發展に於ても恒に即而對自があるのみと考へられる。唯これを即自に見れば無限なる可能が直ちに現實なる直觀の世界となり、對自に見れば可能が直ちに現實に推移する意識の世界啓示の世界となる。併し即自といひ對自とい



ふも für den Philosophen にすぎぬ。哲學者にとつて、この發展に一般と特殊とが分れる。兩者共に本來具體的であるが哲學的反省にはかゝる直觀の世界は顯れぬ。故に卽自に一般を具體的と見れば、特殊は單に其一限定たるにすぎない。之に反して對自に特殊を具體的と見れば、一般はこれに含まるゝものとして單に抽象的である。この卽自の見方の特殊と對自の見方の一般とは結合して die Mitte として特殊の限定を表はす。卽ち概念の契機 Besonderheit である。残れる具體的特殊と一般とは定立されて判斷となる。かくして異なる立場のかゝる内面的聯關に於て辨證の發展が生ずるのであるが、この卽自と對自との結合の可能は既に不可分なる或るものを豫想せねばならぬ。これは純なる意志の働きそのものである。意志は卽自と對自との接觸より發する閃光のうちに自己を顯はす。概念より判斷に移る die erste Negation 判斷の世界に於て自己を充實しゆく<sup>す</sup>は意志の働きがその辯證界にその尖端を觸れたものである。唯かゝる意志の働きはあくまで反省されぬもの故 *das Einzelne* 及び *das Allgemeine* とが分れて現はるゝのである。卽而對自とは常に反省的綜合の跡にすぎない。卽自と對自との分裂卽否定以前にあり、分裂に働き、その綜合に働くものと考へれば、このイデーは單なる卽而對自ではなくして、純なる働きである。

知ることも働くことではなければならぬ。古鏡未だ磨せざる時は天を照し地を照す、磨して後は黒きこと漆の如しといふ時、かゝる黒き鏡はシェリングの絶對者の如きものでなくして反つて自我の奥底である。ディオニシウス、アレオバギータも既にその「消極神學」に輝く闇を説いた。ヘーゲルの理性は意志の反省の一面である。エックハルトが *Gottheit* を考へ *Abgeschiedenheit* を考へたのは寧ろヘーゲルより一步を進んだものと考へる事が出来る。併しこの *Abgeschiedenheit* も自我の到達すべからざる深みを示すものでなければならぬ。實際にエックハルトにはかゝる考へが至る處に述べられてゐる。彼は「神の國は近附けり」といふ説教に於いて、神は自己のうち自己よりも自己に近しいといつた。Ich habe eine Kraft in meiner Seele, die für Gott durch und durch empfänglich ist. Ich bin des so gewiss wie ich lebe, dass nichts mir so nahe ist wie Gott: Gott ist mir näher als ich mir selber bin. Butner 1, S. 135.) 併しこれが明瞭なる主意的立場をとつたのは、ヤコブ・ベームに於てはあつた。而してシェリングがヘーゲルに反撥されて最後に赴いたのもその蹠であつたのである。(完)